

なこと、それはおつとめではな
いかと思います。

教祖は、慶応2年から明治
15年まで、御年で言ううと69歳
から85歳まで、17年にわたり
おつとめを教えて下さいました。

慶応2年は立教29年になり
ます。つまり、教祖が月日のや
しろとなられてからおつとめを
お教え下さるまで30年近くか
かっているという事です。慶応

2年に、「あしきはらひたすけ
たまへ てんりわうのみこと」
の歌と手振りをお教え下され、
次の年の慶応3年の正月から
8月までに、みかぐらうた一下
り目から十二下り目の歌を、そ
の後3年かかって手振りを教
えられます。

明治3年には「ちよとはなし」
と「よろづよ八首」の歌と手
振りを教えられ、明治7年に
は、かぐら面の完成、明治8
年には、ぢば定め、雛形かん
ろだいを据えられ、そして同じ
年、「いちれつすますかんろだ
い」の歌と手振りとを教えら
れ、これでかんろだいのつとめ
の手が一通りが整ったことにな
ります。

その後、11通りのつとめの
手を教えられました。それは、
「こえ」「はえで」「虫払い」「雨
乞い」「雨あずけ」「みのり」の
6つ、これは農事、農業に関す
るお願いづとめ。そして、「を

びや」「ほうそ」「二子」「ちんば
の4つが身上に関するお願いづ
とめ。最後に「むほん」のつと
めです。

そして続いて、明治10年に
は、女鳴物を教えられ、明治
15年、「いちれつすます」が「い
ちれつすまして」に、「あしき
はらひ」が「あしきはらうて」
と改まり今のおつとめのかたち
になりました。

稿本天理教祖伝逸話篇に
その時の様子のお話があり
ます。

「十八 理の歌」

十二下りのお歌が出来た時
に、教祖は、「これが、つとめ
の歌や。どんな節をつけたらよ
いか、皆めいめいに、思うよう
に歌うてみよ。」と、仰せられた。
そこで、皆の者が、めいめいに
歌うたところ、それを聞いてお
られた教祖は、「皆、歌うてく
れたが、そういうふうには歌う
てはない。こういうふうには歌
うては、みずから声を張り
上げて、お歌い下された。次に、

「この歌は、理の歌やから、理
に合わして踊るのや。どうい
うふうには踊らたらよいか皆めい
めに、よいと思うように踊って
みよ。」と、仰せられた。そこで、
皆の者が、それぞれに工夫して
踊ったところ、教祖は、それを
ごらんになつていたが、「皆、
踊つてくれたが、誰も理に合う

ように踊つた者はない。こうい
うふうには踊るのや。ただ踊るの
ではない。理を振るのや。」と、
仰せられ、みずから立つて手振
りをして、皆の者に見せてお教
え下された。こうして、節も手
振りも、一応皆の者にやらせて
みた上、御みずから手本を示
して、お教え下されたのである。
これは、松尾市兵衛の妻ハルが、
語り伝えた話である。

と、教祖が直接歌つて下さり、
踊つてみせて、お教え下さつて
います。

以前、本部の祭典講話で、
おつとめの手について話されて
いた事がありました。高弟の
仲田儀三郎先生や高井直吉先
生が、講社のお手直しにいかれ
時、特に厳しく指導されてい
た事は、親指と小指を付ける
ことだつたそうです。

この話を聞いてから、いつも
気にしながらおてふりをさせて
頂いていますが、本当に毎回意
識をしていないと、すぐ離れて
しまいます。そして、指を意識
してつとめていますと先ほどの
お話でありました、手がぐにや
ぐにやしなくなつてきますし、
背筋も伸びて、おつとめに対す
る気持ちも変わってくるような
気がしています。

真柱様は
「おふでさきについて、真柱様は
「おふでさきの最大の眼目は、
つとめの完成であります。やし
きの掃除に始まり、人衆を寄
せ、心を澄まし、かんろだいを
据え、真柱を迎え入れてと、つ
とめの模様立てを進めること
を軸に、教えの全容を体系立
ててお記し下さっています。」
と、お話し下さつておられます
通り、おふでさき全体を通し
て、おつとめに関するお歌が78
回出てまいります。

りうけいがいさみでるよとを
もうなら かぐらつとめやてを
とりをせよ (一) 14)

このつとめなんの事やとをも
ている よろづたすけのもよふ
ばかりを (二) 9)

これからハにんぢうそろをて
つとめする これてたしかにに
ほんをさまる (三) 76)

つとめさいちがハんよふにな
あたら 天のあたゑもちが
う事なし (十) 34)

はやくと心そろをてしいか
りと つとめするならせかいを
さまる (十四) 92)

と、あるように、このおつとめ
で全ての御守護が頂ける、皆
が心を揃えて一手一つにおつと
めをしたら世界が治まるんだ
と、仰つておられます。

下さつたのはたすけ一条の道の
根本であるおつとめを、教え通
りに勤めることの大切さであ
ります。そして、たとえいかな
る障害があつても、思召しに沿
い切るといふ固い心定めであり
ます。さらに言えば、教祖の
お教え下さつたところに基つき
ひながたを尺度に自ら思索し、
判断し、心を定めて実行する
という姿勢であります。」とお
話下さつておられます。

先月の大教会の大祭で大教
会長様も、おつとめについて元
の理をもとにお話下さいました。
おつとめをつとめることに何
の障害もなくつとめ、私たち
はしっかりと心を定めて、春季
大祭だけではなく、毎月、月
次祭も、朝夕のおつとめも、お
願いづとめも、心を込めて、つ
とめさせて頂かなければならな
いと思わせて頂きます。

先月の年頭会議で大教会長
様から、今年の活動方針が、又、
創立100周年実行委員長からは
スローガンが発表されました。
先ず、活動方針ですが、

「教祖のひながたとは、よう
ぼくを育て増やすこと」
・初席者104名・中席者280名

初席者104名は、今年大教会
が御本部にさせて頂いた心定
めです。大教会では教祖130年
祭以降、人の御守護が思わし
くありません。そこで、何とか